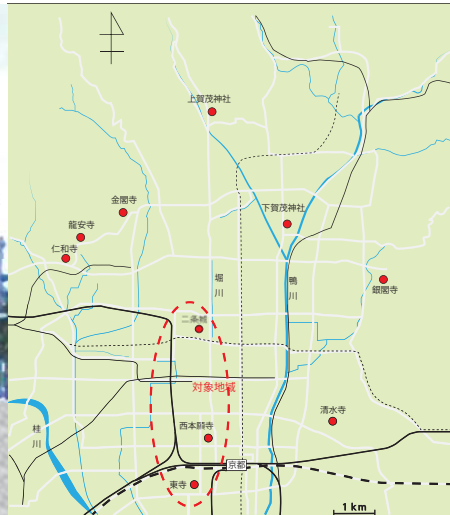


世界文化遺産をはじめとする多くの文化財を有する「歴史都市京都」の防災を考える。

美しく伝統的な風景として開かれる木造の町屋は古からの細い街路の上に密集されるため、延焼火災の危険性を背負っている。さらに、このような延焼火災の消火に役立つと考えられる自然の流水は乏しい。

もし大規模地震が京都に起きた場合を想像してみる。市内に同時多発に起きる火災は広域な延焼火災と広がる。今を誇る世界文化遺産や国の文化財は火災から守れる一方、京都の生きている地域遺産である美しい風景と無数の歴史的な町並の多くは手に負えない。またこの観光都市を訪れた多くの観光客は、帰宅困難者となり町にあふれることが予想される。世界的な観光都市である京都市の裏の顔は、「災害に弱いまち」となっている。



本提案は、かつては町並みに流れていた小規模の旧河川を一部再生し、点在している水の拠点となっている二条城・西本願寺・東寺の三つの世界文化遺産を水のネットワークとして結ぶ。近年再び流れ始めた堀川から引水し、溜まっていた二条城と東寺の外堀には新しい水が注がれ、枯れていた西本願寺の堀にはせせらぎがよみがえる。細い街路に流れる水のネットワークは少ない流量ではあるが、地域住民の生活風景を守る初期消火の水源として十分に役立つ。水のせせらぎが作る風景は、より豊かな生活と、より楽しい観光を導く小さな京（みやこ）の川となる。

### 災害につよい風土に根ざした歴史防災まちづくり



#### 日常時

旧河川の再生と緑豊かなまちづくり

3つの世界遺産をつなぐ歩くまち京都の形成



#### 災害時

防災拠点としての文化財

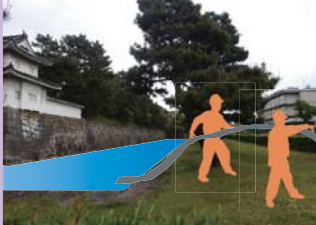
初期消火

延焼防止

帰宅困難者への対応



#### 文化財の自然資源活用「二条城の堀」



現状、二条城の外堀を貯水池として利用すると約5.4万㎡の水を貯められる。巨大な消防水源はホースを用いて周辺の最大半径1.5km地域へ供給することが可能。

#### 延焼火災を防止する「住民による初期消火」

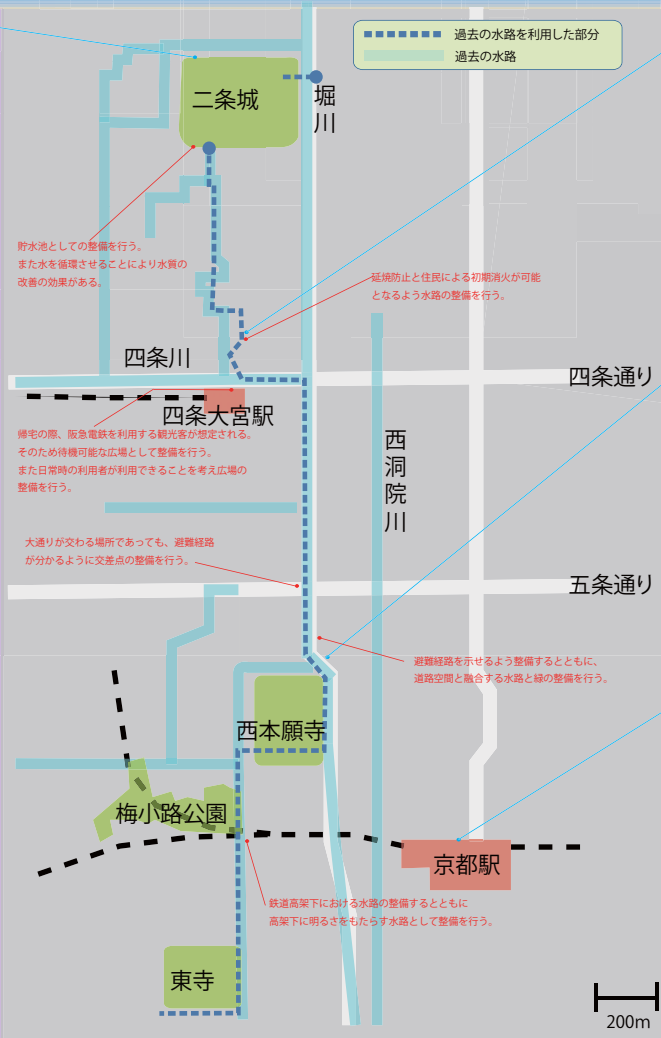


消防自動車が入りにくい細い道にも歴史的な水路は整備される。地震発生時、地域の住民はこの身近な水源を基に初期消火を行うことが可能となる。

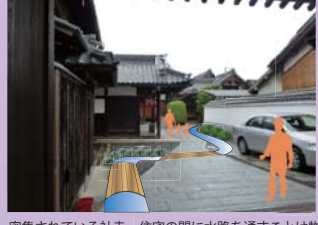
#### 地域に備えられている「初期消火器具」



京都に根付いている学区単位の自主防災組織を中心とした取り組みにより、多くの住宅の前には消火用バケツ・消火器が備えられ、初期消火に役立てられる。



#### 流れる水による「延焼防止」効果



密集されている社寺・住宅の間に水路を通すことは物理的な延焼遮断帯となり、建物と道路をまたぐ延焼火災の防止につながる。

#### 「避難の誘導」を行う避難の目印



京都駅に最も近い梅小路公園や四条大宮駅までの避難経路を水路を用いて誘導する。特に土地勘のない観光客は水路に頼って広域避難場所や駅に辿り着く。

#### 「帰宅困難者」を京都駅に誘導



利用可能路線  
東海道本線（琵琶湖線・湖西線・京都線）  
山陰本線 奈良線  
東海道新幹線 近鉄日本鉄道京都線  
運転再開と共に帰宅が可能になる。

200m

## 四條大宮

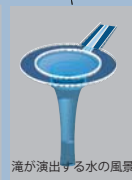
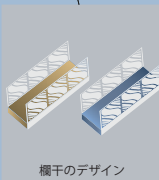
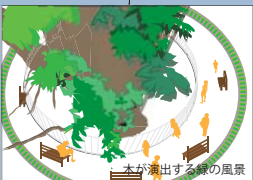
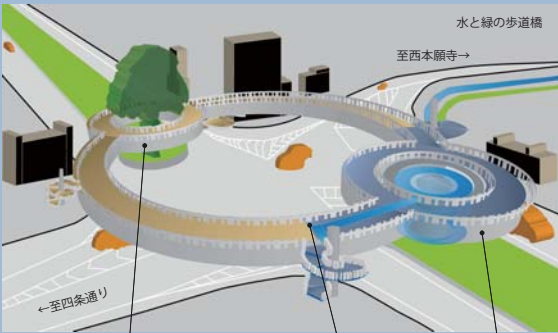
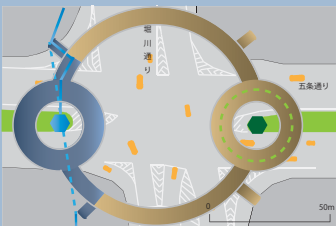
四條大宮は、京福電気鉄道の終着駅と阪急大宮駅、京都市内各地へ繋がるバスターミナルが集結し、多くの人々が行き交う場所である。しかし、その交通量の多さゆえに人々が憩える空間が存在せず、「足を止めて楽しむ」ことが難しい。そこでタクシー乗り場とロータリーを憩いの親水空間として提案する。座ることのできる場所を多数設け、人々が足を休められるようにする。

広場を取り囲むように空中回廊を設置し、木々と触れ合える空間を設ける。広場の中央では水と緑が交差することにより形作られた京都市景が見る人を楽しませる。

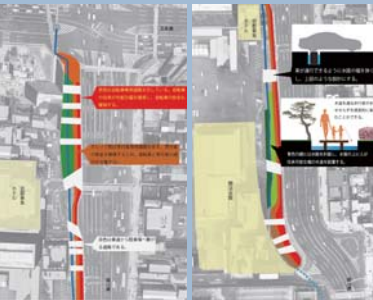


## 堀川五条

堀川五条にかかる既存の歩道橋は一般的な歩道橋であり、水と緑を感じることもできる観光ルートとしては適していない。そこで、水と緑が目で見え楽しめる歩道橋を提案する。歩道橋全体の構造は、円状とする。そして、西側を水の空間、東側を緑の空間として設計する。水の空間では、水路の水を一部ポンプでくみ上げ滝を作ることで、見ていて楽しいものとする。また、緑の空間では大きな木を設け、自然と触れ合える場とする。これらをつくることで、水と緑が連続した観光ルートのひとつのポイントとなる。



## 本願寺会館前



この歩道脇には、既に植栽やベンチが置かれているが、これらが全く活用されておらず、歩道を狭めているだけとなっている。そこで、既存の植栽は出来るだけ活用し、より開かれたアクセスしやすい空間にする。また、そこに水路を通すことで水と緑に触れ合えるようにする。さらに、歩道側はその広い空間を活かし自転車道を新設することで、歩行者・自転車双方にとって利用しやすい道へと再整備する。

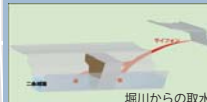
## JR 線路下



JR 各線の高架下であるこの場所は、日中も薄暗く歩いて観光できる道ではない。そこで、ここに光を取り入れ、歩きやすい道路を提案する。北より続く水路の水を利用し、また、高架下という地理条件から自線と同じ高さの水路を設置する。さらに、この水路を通して自然光を高架下内に取り入れることで、高架下を明るく通りやすい道へと整備する。



## 二条城



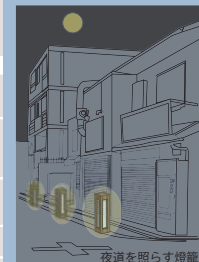
二条城の堀は多くの水を蓄えられるが、現在は安定した水の供給がなく、また水の循環も悪く環境が悪い。そこで、堀川より取水することで堀の水環境をよくすることを提案する。堀川からサイフォンの原理を利用して、世界文化遺産である石垣を傷付けずに水源を確保する。また、取水口を二カ所設けることで水を循環させ、水環境の改善も図る。

## 神泉苑通り

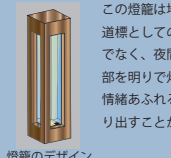


神泉苑通りを通してきた水路は、過去の水路と同様の場所に通すため現在ある社寺の敷地内にも通るようになる。社寺内では、打ち水に使っていただくほか、植栽等への水やりにも利用してもらうなど、普段の生活の中で使用してもらえるようにする。

## 水路が見えない箇所での工夫

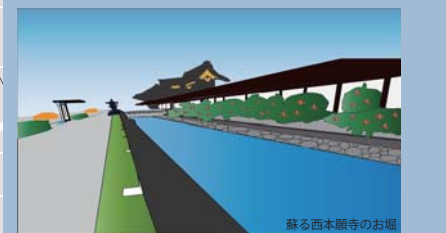


今回の提案で、地下に水路が流れている箇所の地上面に、水路が流れていることを認識してもらうため、燈籠を配置する。



燈籠のデザイン

## 西本願寺



近代になり埋められてしまった北側からの水路を復活させることで、現在空になっている堀に水を満たし、世界遺産の門前に潤いを与える。

開水路

開水路

地下水路

200m